女學雜誌

第二百九十六號
明治二十四年十二月十九日發兌

白紙

小說の如き實談、極慘の艶話、文素にして意限りなきの投書一篇を掲ぐ。

東京府會廢娼建議の夜

孤兒

震地の可憫兒を見て一篇の長詩を與ふ、原意はホワイト、作者は雲峯子。

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 296. DECEMBER 19TH. 1891.

第二百九十六號目次

EDITORIAL; --The Petition for the Abolition of Licensed Prostitution, in Tokyo Fukwai.

CHILDREN'S COLUMN:--"Little Lord Fauntleroy." (Continued.)

MISCELLANEOUS:—"The blank Letter." A Poem ot the orphan.

LITERARY:- The so-called Realty of Poems. The Sincerity-and Poem.

THOUGHTS AND FANCIES;—The Easy Labor. The Sad Words.

HOUSEHOLD:—"Matauyemon of Kinokuniya." (Sanka-Sekiwo.)

CRITICAL NOTES:--The Japanese New History. "The Chinese History."

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

●社說 東京府會廢娼建議

●兒籃 小公子(若松しづ子)

●雜錄 白紙(大給生)○孤兒(雲峯子)

●文學 所云る詩の實際○至誠と詩歌

●隨感 安産○うき言の葉

●家政 紀伊の國也亦右衞門(山下石翁)

●批評 日本新歴史○支那歴史

●時事 谷子●鳥尾得庵居士○鐵道國有○勤儉尚武○解散

●女報

THE "JOGAKU ZASSHI."

THE *Jogaku Zasshi* (Woman's Magazine) publishes an authorized report of the annual meeting ot the League for the Abolition of Licensed Prostitution, held on the 23rd instant at the Meiji Jogakko, Tokyo. The chair was takn by Mr. Yuasa Jiro, Member of the Diet, Among those present, numbering 40 in all, may be mentioned Mr. Kojima Kango, Member of the Municipel Council of Tokyo; Mr. Tsuda Sen, the wellknown agriculturist and temperance lecturer; Mr. Watase, of the Toyo Eiwa Gakko; and Mr. Nemoto Sei of the Meiji Gaku-in. The meeting was also attended by deputations from ten associations devoted to the cause of the abolition of licenced prostitution. Proceedings opened by singing the *Hai-sho no uta* (Song of Abolition of Prostitution) by female students. The programme consisted of the deliberation of four propositions, and the reading of congratulatory letters received from various localities. The first proposition, introduced by Mr. Iino Kichisaburo, related to the relief of the unfortunate female survivors of the recent earthquake who have been rescued by members of the League from a life of infamy into which they were on the point of falling. After a spirited debate, it was decided that a Committee be appointed to endeavour to find occupa-tion for these women in Tokyo and Yokohama. Mr. Watase Torajiro, Mr. Sasaki Shojuro, Mr. Nemo-to Sei, Mrs. Yuasa Hatsu, Mrs. Ushioda Chise, Mr. Tsuda Sen, Mr. Kojima Kango, Mr. Shimada Saburo, Mr. Iino Kichisaburo, and Mr. Iwamoto Zenji were appointed members of the Committee. The second proposition by Mr. Iwamoto Zenji, providing for the continued publication of the Leagu's organ, was unanimously voted The third proposition, by Mr. Iwamoto Zenji, related to petitioning the Diet during the present session for the abolition of public prostitution and for depriving brothel-keepers of their political rights. It included also projects for dringing pressure to bear on the members of all Local Assemblies. For interviewing members of the Diet, and for the general ral distribution of printed tracts and lectures relating to the subject. It received immediate and unanimous approbation. Equally unanimous assent was given to the fourth and last proposition, introduced by Mr. Aoki Hidejiro, namely, that a memorial be presented to the Minister of Home Affairs, requesting him to enforce all existing laws and regulations tending to the abolition of public prostitution. The preparation of the memorial and its presentation were entrusted to a Committee consisting of Mr. Yuasa Jiro, Mr. Shimada Saburo, and Mr. Iwamoto Zenji. The recitation of the *Hai-sho Banzai* (Long Live the Cause of Abolition) closed the meeting. Tea was served in a separate room, after which those present at the meeting adjourned to the Fujimi-ken restaurant for luncheon, and disprsed about 4 o'clock p. m.

(Japan Mail)

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百九十六號
明治二十四年十二月十九日發兌

社說

東京府廢娼論

廢娼論の行はるゝに難き、都會は地方の比ひにあらず、而して、都會の中、三府の主たる東京の如きは、取分け至難至艱の事情襍々ありと云つべし。然れども、そは一段高等の地より大觀せざるに因す。苟くも奮つて眞理の實行に鞠躬せば、天下日輪の照らす處ろ、何處にか暗黑の魔鬼をして久しく蟄伏せしむることをせん。

東京府會議員中の同志者は固く之を信じ、一昨年來每歲其の意見を提出して、其都度他の冷淡者の心を動かし來り、本年の如きは極めて望みある好景況を呈するに至りぬ。

十二月十七日、府會議長須藤時一郎氏席に着し、五十一番議員小島官吾君の動議提出を報道す。昨年府會に同一の建議ありし節は、妓樓主人數十名群來し、議員の后の方にヒシ〱と詰掛け、只ならぬ氣配に見られしかば、議員中多少躊躇せし向なきにしもあらざりき。本年は、提出の當夜迄をと秘して聞えざるやうに取計らひけるに、此夜すでに數名の醜業者逸早く來場してありけり。之に對し吾黨の人數多來集し、議場の光景いと燦らやかに見へぬ。

小島君徐むろに立ち、書記が建議文を朗讀したるに續いで、更に一層其主旨を辨明す。論序明晰、音吐淸澄、諄々として滯みなく數百言を述べ下る中、或は太政官司法省の布達を引て政府法律の精髓を確かめ、或は府會が前年賦金を全廢したる當時の決意を證し、或は去一年間府下遊廓に費されたる金額一百五十万餘圓の多きを示して、國家經濟の根本を慨するなど、頗ぶる聽衆の耳を傾けしめたり。六十五番、田口卯吉君直ちに立つて贊成と叫び、其眞摯にして重厚なる辨舌もて、經濟上多年の持論を吐く、曰く妓樓主人は一種の高利貸の如し、專賣權を握つて世上尤とも憫れむべき貧女子の頭をはり、其稼錢の過半を奪つて身は大厦高樓の內に住まひ、或は錦衣を着、馬車に乘り、驕奢華族の如し、斯る不都合千万の制度文明國に存ずべきものにあらず、速かに之を全廢せざる可らずと。四十四番宮本賴三君次に贊成と快呼し、議員中賦金三万圓の事に局促して此大問題に躊躇するものあるは歎ずべきなり、三万圓の金は、徒らに空費する百五十万圓に比較して海滴の如し、たとひ本年直ちに賦金三万圓を損すとも此

大問題を考がへざる可らずと云ふ。

以上三君の論辨は滿堂を一洗し、聽者の心識らずして化しぬ、亦何等の反對論も出でざりき。然るに、之を議題とし、更に精論せんとするの採決に至り、起立二十二名、僅にして出席員五十五名の過半數に及ばざりき。

然るに、此採決は意外の結果なりとて、囂々不平を訴ふるものあり、更めて採決せよと叫ぶものも多かりき。抑そも此の議題とするや否やの採決は、實際、建議案を可否すると同樣の格に當れば、此採決のみにて消滅せしは、即はち建議案に對し、實際の否論者たゞ僅に多數なるを證するものなり。而して否論者は、建議者の公明正大なる論理に反對するの理由を保たざれば、たゞ沈默して器械的の起立をなし、此の唯一の方便をもて只僅かに眞理の行るゝを防ぎたり。左れば本年は昨年に比し、驚ろくべき好景況なりき。採決后、遺憾殘念と叫ぶ聲議員中所々に聞え、鬱勃たる慷慨去る年の比ひあらず、吾人は來年こそはと信じ、先づ雀躍して喜びぬ。議長須藤君は熱心なる同意者なり、壇上より呼んで曰く、小島君然らば復た來年にと、吾人も亦深く之を矢ふ。

東京府會廢娼建議案

東京府會に於ける廢娼建議は、年と共に勢力を加ふ。本年も亦た五十一番議員小島宮吾氏が不屈不撓の精神より發す、一昨日其提出に係る動議の案下の如く、鬱勃たる慨念尤とも觀るべし。則はち轉載し、吾人が並々ならぬ同情を寄す。

娼妓を公許す可らざるの動議

謹みて白す。娼妓の公許す可らざる議に付ては、一昨年來再應高聽を煩はせしことに有之、國家の躰面上實以て一日も等閑に附す可らざる者と被存候。凡そ賣淫者を悉とく廢滅せんとするは中々に望む可らざる儀に有之、譬へば盜賊の決して種を盡さざると一般、敢て企及す可らざるものに候へ共、左ればとて、之を公許公認し、白日堂々帝國主府の中央にて營業せしめ候は以ての外の儀と被存候。然るに尙ほ此が公許を差止めざるは、一つに因習の久しき慣れて之を顧みざるの故と、二つに奇怪なる誤解謬論の往々にして世に流布するとの故にて候。誤解謬論とは、公娼を置くによりて、悪風の横行を小區域内に制限し、密賣淫と梅毒の自由に蔓延するを防ぐとの主旨に有之、全く事實を顚倒いたしたるものにて候。其理は前年精はしく辨難し、悪風俗、密賣淫、及び梅毒は、公娼を置くによりて彌よ激烈となるべき所以を十分に論明したる心得に候、幸ひにして諸君各位は既に此明白の理を認承被成下候事と存居候。實に、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

公娼は悪風俗を誘ひ生ずるの毒源に有之、之よりして風儀一般に腐れ、淫猥の習ひ一面に傳染し、以て密賣淫を增殖し、梅毒を蔓延せしむるものにて候。此の故に、鹿島縣の如きは、近年公娼を置てより、初めて此等の弊害激烈となり、縣下の情態一變せしかば、本年縣會に廢娼の議起り、二名に對する三十三名の大多數を以て公娼廢止に可決いたし候。之に反し、群馬縣の如き、曩に十ヶ所の遊廓中、先づ試みに三ヶ所を廢し其結果を吟味せしに、廢止后果して好成果を生ぜしかば、本年に至り又々殘る七ヶ所の遊廓を全廢す可きヿに指令せられ候。左れば、公娼を廢するは、悪風を引起すものに無之、反つて悪風を滅するものに候。況んや、國家が娼妓の營業を明許し、婦女子が黄白の為に節を賣り、男子が錢を以て女性を玩弄し、白晝公然、人類を情慾の器械となす者あるを見、默然之を官許公認するは驚ろくべきの政治と被存候。或は之を出稼と稱へ、妓樓は一種の貸坐敷に過ぎずと辨ずるものも有之候得共、今の出稼規則は、其實、身を賣るの制度に異ならずと被存候。娼妓若干の金を借りて遊廓に出稼する后ち、其醜業を嫌つて貸座敷を立去らんとすれば、妓樓主人が之を差止るは勿論、警察署は態々之を抑留して是非とも其醜業を繼續せしめんと取計はれ候段、實際錢の為に身を賣り、賣淫の奴隷となりて主人に束縛せらるゝ者に無相違候。夫れ借金返辨の途不相立に付、公賣處分を受候などは法内無論の事に有之候へ共、出稼前借金の為に自由の身を束縛せられ、病めば食を減ぜられ、病重ければ藥も與へられず、死すれば所有品を悉皆奪掠せられ候などは、立憲政躰の國、憲法によりて人權を保護せらるゝの文明國には決して有之まじきの大怪事に候。然るに政府之を公許し、人民之を公認し、府百万の蒼生の利害を任じ、全國府縣會の模範たらんヿを欲する吾東京府會の議員にして之を默々に附するは、無此上恥辱と被存候。二三年來醜業婦女子數百人米國に渡航致候得ば、同胞初めて之に喫驚し、囂々として國辱天外より落下せし程に申囃し候。然れども、斯る國辱は近年初て湧出でたる者に無之、府内に公娼を置き、東海道筋に妓樓を構え、全國主なる繁華の地の中心に大厦高樓の賣淫處を設置致候限りは、多年既に其大恥辱を海外に曝露せしヿに候。英米人は、每度此景況を彼國の新聞紙上に掲載し、殊に圖を示し畫を彩どりて日本娼妓の情態を極めて細かに吹聽いたし候。凡そ海外の新聞紙を讀むものは、斯る通信に接する每に慨歎無限腸を斷ずるの遺恨一日にあらず候。之と共に英米人は多年此通信を讀み、日本の公許賣淫は其大評判の種と相成居ものに候。左れば、僅々數百の出稼女よりは、東京府下のみにて五千人に越え、全國にて五万に超ゆる官許の賣淫營業者を速に差止め、日本國内には左樣の者決して無之ヿを万國に誇示したき者に候。此に至らば、多少の出稼女ありとも、そは横濱の外國水夫がその不行跡によりて直ちに本國人物躰の品格を墜さゝるが如く、國法を脱して海外に密賣するもの多少ありと雖ども大日本の國光を暗くするには至り申間敷候。要するに、今に於て娼妓の公許を差止め、日本政府は賣淫を官許する

者に非ずとの美事を速に天下に廣告するは至極肝要に候。然るに、率先して此美事を顯揚するは、當に日本の主府たる東京なるべく、東京をして此美事を爲さしむるは、其公議輿論を決する所の吾府會なるべく、府會をして猛然此美事を可決せしむるは、公義にして愛國の念に厚き議員諸君各位の力に存することに候。高知縣、栃木縣、群馬縣、宮城縣、神奈川縣、鹿兒島縣、福島縣の如き皆既に同樣の議決を爲し、長野縣、岐阜縣、千葉縣、山梨縣の如きは目下其氣勢將に全勝を博せんとするの形況に候。願わくは諸君今に於て猛斷快裁し、娼妓を公許す可らざるの議を速かに可決し、吾府知事に建議して切に其採納を請わん。斯て公許差止の后は、妓樓主人と娼妓との關係は尋常貸借法によりて處理せらるべく、其上密かに賣淫するものは、更に其取締法なきにしも無之、詳細は前年畧ぼ陳述したる儀に候へ共、今に於て豫じめ其取締法を公論するは本員の思衷に非ず、大要其取締は警察官に委任し實際決して不都合なきものたることを斷言するに止め置候。よりて、娼妓は公許す可らざるものたるを辨じ、其公許を速かに差止められんことを府知事に建議致度、此旨動議提出、謹みて諸君の賛成を仰ぐ所に候。

明治廿四年十二月十七日

五十一番　小島官吾

東京府會議長須藤時一郎殿

兒籃

小公子

第十四回（乙）

若松しづ子

其若人の話しの書といふは、新聞の表に有り升て、それをヂット、眺めて居たヂックの眼と口は、大きく開いて、其驚ろいた顏は靑くあつて居升た。そこで、不審に思ふた其人が又、

これはしたり、ヂック、どふしたのだ？、なんでそんなに膽を潰してるんだ？

ヂックは容易ならぬ一大事が出來したといふ顏つきをして居升た。さうして、主張者の母、フォントルロイ夫人と下に記るした書を指し升たが、その書といふは黑々とした頭髮を太く編んだのが、グル〳〵と頭に捲いてある、眼の大きい一寸立派な女でした。

この女なら、おらあ、旦那知つてるより、好く知つてるんだ。

彼の紳士は笑ひ出し升た。

ヂック、おまへどこで出逢つたんだ？エーニユーポートへ避

暑に出かけた時か、それとも、パリへ見物に行つた時でも有つたか？

さふいわれても、ヂックは笑ふことさへ忘れた樣でした。それで一寸もさし置けぬ大事が起つて、當分家業も打捨てるのかと思われる樣子で、刷毛其外の物を片づけ始め升た。

マア、どふでも好いが、知つてるとは知つてるんだ。今朝は、仕事も何もおしまいだ。

と捨言葉をしてそして五分も經ぬ中に、彼のホー氏の角店指して一走りに行升た。帳場の向ふに坐つて居つたホー氏も相變らず手には新聞紙を持つて駈込むヂックを見てビックリし升した。餘り急いで走つた故、ヂックは息をきつて居升た。それで新聞を帳場の机の上へ投げました切り、暫らく、口もきけぬ程でした。ホー氏は、

ヤアー、何を持つて來たんだ？

マア、見ねい、此の書の女を見ねい、これが華族なんかでたまるもんかヨゥ（とさも見下げたといふ聲で）華族のかみさんなんかであるもんか、これがおミナでなけりやあ、おらあ旦那に食われつちまたつて介ねい。おミナよ、おミーナに締つてらア。どこに居たつて、知れらア、ベン兒だつて過ぐ分らア、噓なら聞いて見ねい。

ホー氏は、腰を拔かした樣でした。

ダカラ、わしが言ねいこつちやねい、仕組んだ狂言に違ねいッテだ。あれがアメリカ生れだつていふんではめたにちげいねいんだ。

ヂックは、呆れ聲で

ナニテッキリ此女さ、此女が拵らへた狂言とおらあ思ふんだ。ダッテ、いつでも惡戲斗りして居やがつたもの、デネ、此書を見ると直ぐと心に浮んだとがあるんだ、ソラネ、こないだ讀だ新聞に、其女の連れて來た子のとこネ、ソウ、聰んとこに傷の跡があるつて書いて有つたら、ナア、それとこれと一處にして見ねい、其傷ッテいふナア、こいつの拵らへたのよ。ダカラ、そいつの連れて來た兒つていふナア、華族處か、あれが華族ならおれも華族だ。そりや、ベン兒の兒よ、ソラおれに玉ア投けつけた時あてた兒よ。

ヂックは全躰鋭敏兒で、大い都でもまれ〳〵して尚一層鋭敏にあつたのでした。いづでも目端を利かせ、いつも頓智を廻し

て居升たが、此時發見した一大事に付て、氣を燋て騷ぐのは結句面白半分の樣でした。其朝、若しフォントルロイが其店を覗うとが出來たならば、たとひ自分には關係なく他の兒の運定めになる相談や、計畫でおつたにしろ、余ほど興あるとに思つたでせう。

ホー氏は此一條につけて新たに起つた自分の大責任に壓倒されて殆んど夢中の躰でした。そして、ヂックの威勢もイザ討ち出さうといふ塩梅でした。先づペンへ向けて手紙を書き始め、彼の書を切り抜いて封入し升た。ホー氏も亦、セドリックへ一通、侯爵へ一通手紙を認め升た。兩人が手紙を認める眞最中に、ヂックが急に思ひ出したものが有り升た。

チイ、あの新聞をわしに呉れた人チイ、あれは代言人だがこゝでどふしたもんか、一つ尋て見よふじやねいか　、代言人なんかなら、知つてるに諦つてるだらう。

かふ聞いて、ホー氏はヂックの思ひつき、ヂックの如才ないとに大感服ヌ感服し升た。

さうよ、さうだつけ。かふいふとにや、なんでも代言人が入用んだ。

そこで、店を手代りに賴んで、外套も大急ぎに引つ掛け、ヂックと下町へ出かけ、彼のハリソンといふ代言人に小説めいた話を持つて行き升た處が、彼の紳士も一方ならず驚き升た。此若紳士は余程名を起さうといふ心掛が有つて、充分手を開いて居つたから好し、さもなければ、此二人の申立を容易に取り上げなかつたかも知れません。なぜといふに、其話といふは、いかにも、とつて着けた樣に奇妙不思議に聞こえ升た。併し差し當り、仕事はなく、ヂックの人となりを畧察し、又運よくヂックの話し樣も閑畧で、尤もらしく聞こえ升た。そしてホー氏の言葉に、

おまへさん、一時間いくらといふのでもかまわねいから、よく調べて貰いていんだ。わしが一切呑み込んでるから。ブランク町の角の萬屋ホップスといふんだ、宜しふがすか。

スルト、ハリソン氏が、

左樣さ、これが思ひ通りにいけば、大したとになります。フォントルロイ殿は固より、僕にとつても非常な運定めになり升。それで兎に角事實の探索にとり掛つて、差支は有りません。新聞で見ると引連て來た兒のとに少し曖昧が有つ

た樣子です、其女が其年齢の話しにあつて、前後揃わぬとを言つたとかで既に疑惑を起してるんです。そこで、第一ヂックの兒と、ドリンコート家の抱の代言士に手紙を出ませう。

そこで、其日の晩方までに二通の大事な書面が投函になり升た。一通はニユーヨークの港から便船で、英國へと走り、モ一通は、客や手紙を載せて、カリフオルニアに通ずる滊車を飛ばせて行き升た。一通は「ハヴイシヤム殿」、も一通はベンジヤミン、チブトンと表面に書いて有り升た。

其夜は店を閉めると、ホ氏ヂックの兩人は奥に夜半まで話しつゞけて居升た。

雜録

涙滴々

○白帋　赤田生投

左は大給某其友に送りける陳情の書なり、何んぞ慘ましきや。かゝげて、示す。

御手紙拜見仕候余が近情に付き御示諭被下御友愛の情愈々肺肝に徹し申候余は歸郷以來平生の志望も平生の活氣も殆ど吾身を去り今は悲しさ悔しさ苦しさ遣る方なき事に御坐候斯く突然に申上候とも精く其事情を語り申候はずば君には御譯りなき事と存候悲を堪へ涙を忍びて以下陳白可申上候却説其事情と申候は他に候はず老父母頻に余に迫りて身持を致させんと謀り申候事に御坐候成程雙親共に早や六十の坂を三つ四つも越へ余も歳正に二十四、一人前の男子と相成り且つ我家には余より外に子女とては藥にし度くも一粒無之有様に御坐候へば一から十、何々と申候ても老父母今日の請求は理の理當然至極の事に御坐候若し之れを拒み嫌ひ候はゞ是より不孝は世に有間敷き事と存申候勿論余は之を拒むの不孝たるを十分承知の上の承知に御坐候得共如何にせん父母の請求を諾するとは如何に我自身を慘酷に薄情に無慈悲になしたりとも不能事に御坐候斯く申上候へば君は或は日はむ汝は妻子を持ば平生の志望を達する能はずと思ふての事ならむと余は併し斯る思違ひの論を言張るものには無之候却て平生の志望を成就せんと欲せば吾を助くる良妻こそ望ましけれ之れが爲めに父

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

母の高意を拒ばむの意は毛頭無之候。余の從兄の師友として十年此に交はる從兄は爾ぢまだ學問を不足としての苦情ならむと申候成程吾れとても吾が今日の學問を以て十分なりとは存じ不申候へ共假令妻子を持つも讀書勉强に何んの妨げか之れ有らむと存申候へば此の事を以て老父母慈愛の言を拒む事は無之候。それに或る近き親類の者共は余を疑ひて彼は他と深く契る所の者ありて父母の撰みに入る嫁を嫌ひての事にあらざるかと申候是れ何等の事ぞ余倘ほ正氣あり未だ痴漢の玩物とはならず如何にして斯る根情を持し候はんや。又た父母とても其人を既に擇びて後余に無理やりに推つけんとする苦根情＝我國の一大舊弊＝を持するものには無之候父母は其人の如きは何處々々迄も爾ぢの意に任かすと仰せられ未た其人の如何など、申候段に至り不申候。只だ一人前の男子と成りたれば一刻も早く身持をさせて見度し安心させ、安心し度しと云ふ本心の愛の塊、情の結晶、何んとも云はれぬ慈愛一杯の頁心、之れを識らざるに候はず知りて〳〵知り拔きて而かも倘ほ拒み奉る此の心の苦痛、君は御推察被下候歟、」余が此の九月歸省致せし翌日、余は勝手の方に余か幼少の時分より吾家に使事する老婢の外は年若き女のかひ〴〵しく立働き居るを見付けて候へば母上に向ひ彼は何者に候哉と問ひ申候へは母上は彼は老婢に手を假さん爲め昨日隣村より來りし者と答へられ候。余は心の中に何處にか見し事のある樣と記臆を辿り候ひしもツイ其時には思當り候はざりき。此女余が爲に朝は水を酌み夜は床を整へ三度の食事衣裳の事其他總の用を辨じ申候。其の擧姿至りて温柔にして下卑ならず、又た女は余を視る毎に身を慄はして十分の恐怖を感ずるが如き樣子に見へ候。余は不思議の女と怪しみてのみ候ひき。四五日立ちて或る日父上は或る近村なる新婚の家に祝儀にとて晝飯後匆々家を出でられ母上も又た一時頃より留守を老婢と彼の女とに頼みて御寺詣に立出でられ候。余は獨り椽側に椅子に倚り讀書して候ひき。此時勝手口より庭の方に出つる飛石を傳ひ來りし者あり、見れば余が不思議な女と思ふ女にて候。彼は朝水を余が爲めに酌み來る外一度も此に出で來りたる事なきにと思ふ時、女は最早や椽側に登る處の石段の上に膝づき、涙をばら〳〵と落したる儘に、帶下より一通の手紙を取出し、余が膝の下に差出して候。して堪へ入る計に聲を忍びて泣きて候。

余は餘りの事に訝しく思ひ惑ひながら、手に取りて見れば、封の表へ大給三郎様にと、當の名を記したるのみにて裏面吾名を畧せず、誰人の狀文にや相知れ不申、慥に女性の筆の樣には候へ共手蹟さへ亂れて麻糸の如くに見申候。余は怪訝愈や増し候ひしも、極めて冷かさ極めて靜かさの樣子を以て封を推斷り見れば、コハ又如何に、一尺有餘の白紙のみ封中より出てゝ候。此の次第に余は少し腹立ちて候へ共、最前よりの女の樣子如何にも仔細あるらしく思はれ候へば、疑、訝、怒の胸の騷ぎを總て抑へて、今聲を忍ひて泣き咽ぶ女に向ひ、此の手紙は誰人に賴まれてか、但し又た其身の所爲か、用こそあらむ物語り聞かせよと、イト穩かに問掛申候處、女はようくに顔を上げ、一禮して其無禮の所爲を謝して申候樣、御怪訝も御尤に候はむ、その御手紙は河野の孃樣御最後の其時より、預り申して、今此に御意を煩はしてと、聲を震はして申述候。河野の娘とは去年亡くありしお雪どのゝ事ならむさらば子細もあらむ、兎角に、靜に語り聞かせよと、怪みながら尋懸け申候、此の時女は淚を拭ひ、緣側に揚り、吾椅子の下へ正坐し手を杖きて何か語らむとせしが、又も湧きくる淚に堪へざりけむ、袖以て顔を掩ひ、平伏して泣き出して候。余も此の時は早や無量の感慨に擊たれ申候。四邊は蕭然として音もなく、庭の木の葉は秋氣に拂われて、舞ひ落ち、彼所に三ッ五ッ、此所に六ッ八ッ、日は未だ高くあれども、冷氣は身に染みて候。同時に記臆は余が幼時に溯りて候。思ひ想へば河野秀雄と相知たるは、余が十三の時、其前より父母と父母との骨肉も啻ならざりしも、他村にして親類ならざれば、小兒と小兒とはそれ迄は知らざりし事。其時分我村には學校なく、二里隔りたる河野の村に學校ありし事。吾は河野の家に世話になり、其村の學校に秀雄兄妹と共に通學致せし事。秀雄が病氣などの事あるときは、余は秀雄に代りて其妹を保護せし事。妹も又た眞の兄に劣らず余を敬愛せし事。余が十五、秀雄が十六歲の時、共に國の都(我村より三里隔りたる)に出で、或る漢學先生の門弟となりし事。其前後に河野一家は、公役の爲めに擧りて國の都に移りし事。之より余は一層河野一家と親みし事。其後秀雄は十九の春上京せし事。秀雄の父母は秀雄の代りにとて、余を漢學塾舍より呼取り、其家に通學せしめたる事。余は數ヶ月にして或る事情の爲めに河

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

野の家を出で、塾舎に歸りし事。余が二十の夏秀雄は暑中休暇に歸省せし事。其秋には秀雄と共に上京せし事。其時兩家の父母親戚、秀雄の家に集ひて、別宴を開きし事。其日に限りて、余は秀雄の妹を見當らざりし事。今前に在る女も、當時河野家に事へありし事。其翌々年、即ち去歳の春、在京の秀雄に妹の危篤報じ來りし事。余は當時一生懸命に勉強して、殆んど秀雄の妹の如何を忘却したる有樣なりし事。秀雄報に接して歸省せし事。雪子は、其春の五月頃十九年を一期として、朝の露と消へ失せし事。秀雄は其の最後の場に遲れしこと等、河野家雪子に關せし見聞は、一瞬一瞬に腦裡を打ちて、縷々として絕へ不申候。彼が親切の顏、彼が眞面目の顏色、彼が心配の時の眼付き、彼が物語る時の口元、有〳〵と見へ申候。想返せば、余は何となく、彼に對して濟まぬ心地せられ、彼れが爲めに何にか吾身に荷へる者あるが如く感ぜられ候に付き、其最後の仔細白紙の趣旨、早く聞き度相成申候。されば余は女に向ひ、お前は雪さまの最後の場に臨みしならん、其の時の事を想ひ起して悲しむも當然、自分も他人ながら彼の家には世話になりし事もあり、哀しき事限りなし、仔細もあらば堪へて早く聞かして貰ひ度しと申候。

其時、女は目を推し拭ひ、御尋なくとも御話し申上候はずは、孃樣の思ひが達かぬ事、只だ餘りの無慘のことに今も淚に眩れ、口結ぶれて失禮致して候、まゝ御聞き被下。貴君樣方御兩人御上京の卽時は、孃樣少々御煩の氣味にて、何事にまれ氣も進まぬ御模樣にて候ひしも、それより一ヶ月も立ち、御快復されてより後は、孃樣以前に勝ち、その御出精の事と申すものは、それ〳〵は何とも申されぬ程、縫針讀書織物は勿論又挿花茶の道に至る迄女の仕事と申すもの、何に一つ御出來なさらぬ事は有り不申、花見遊山に耽り盛りの御年頃に遊ばしながら、誰れ催促しても御聞入れなく、御身の脩業に一心不亂、只た水江村の叔母樣〳〵と御慕ひ遊ばして、此處の御宅に計りは、月に一度位は屹度御出遊ばし、御出なされば、二三日御留り遊ばす事、御定りの樣に御座候ひし。斯くして一年と暮れ、二年と明け、孃樣も年は今、女の盛り、器量と申し藝能と申し、世に比なき御方に成り遊ばされたれば、所々方々の御家より婚事の申込み毎日の樣に續きしも、不思議の事には、何故か、河野樣には一々御斷りなされ候へば、去年の正月

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

頃よりは、申込みも稀れになつて、近邊の下女噺などには、此事が常々口に登り、河野のお孃樣は、乾度大給樣の嫁樣と定まり居るものよと、噂致せし位、私共も始めの程は、只だ聞流しに致し居候ひしも、後には万更にもあらぬ事、御家柄と云ひ、年齢の御似合と云ひ、早く左樣に御成り遊ばせば好しと迄思ひ込み、芽出度し嘻ばしと、吾身の事の樣に待ち樂みて候。して此く、誰云ふとなく評判致せし頃より又た、一層不思議の事には、殿樣奥樣、御兩人共に孃樣がこゝの御宅に御出遊す事を、非常に御嫌ひ遊ばす御樣子、一昨年の秋頃迄は、左程にも見へ不申候ひしも、去年に入りての後は、中々の事にて、花見遊山には御勸めありながら、水江村へとなれば、必ず御叱り遊ばして、御止め被成、其の御思召の程は私共には何とも譯り不申、何にか事情もあらんと、訝かしく存じ居候ひき。丁度去年の二月の末か、三月の始頃、孃樣水江へは、正月より一度も行かざればとて、母上樣に是非にと御願ひなされ、御不機嫌の中に、御許を得て、その御宅に御出で遊ばして、一週間計も御泊り被成候。奥樣御心配なされて、私を御迎に立てゝ呼歸し遊ばして孃樣御歸り遊ばし候ひし其夜の事、殿樣奥樣御坐敷に孃樣を御呼びになりて、何にか深更迄、御意見ありし御樣子、私共は早く床に就き申候へば其夜の事は知らずに熟睡致申候。翌朝何時になく、孃樣は朝遲く迄御起きなき故私は御床の間に御伺ひ申候へば何にか少し御氣分惡しとの事。ア、勿躰なし、孃樣此日より遂に大病に御成り遊ばしと、女は泣き出して候。女は又た涙をすゝりて、語を續け申候樣。貴君樣能く御聞被下、斯くして孃樣は、日一日に病氣重く御成り遊ばし、お醫者も御かゝりの外に幾人となく御見舞被成候らひしも、皆何んとか名さへ六ケ敷き病とて、藥の効能至りて薄すく、食事とては、中頃より一膳も召上り候はず、御親類の御見舞物は澤山に御坐候へども、御手にもふれ遊ばさず、吉村樣よりの御見舞などは、色々御手數の入りし品あり候ひしも、見もなさらぬ御次第。して私は難有くも持躰なくも、孃樣の御傍を片時も離なされず、他の者供は誰一人病室に居るをさへ御嫌ひ遊ばし、辱なくも、父上母上樣迄、永居は御斷り遊ばす程なるに、私には抱き付きて、姉よ〳〵と迄に御意に合はせ給ひ、その御慈愛の聲は、今も殘りて耳を去り不申候。」して又た御煩ひの日

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に増し募るに付け、御達者の時は、一言の噂さゝへなさらぬ貴君樣の事を返操へし〳〵て、念ずる樣に指折り數へ、御自分の御歳貴君樣の御歳を問ひて答へつ——其の貴君樣を御慕ひ遊ばさる樣可愛らしくとも、情深かくとも、何んとも私は今も思へば堪へ不申候。されど、斯る事は、他の前は勿論御兩親の前にても、一言漏し給はず候へば、誰れも此の事を知るものとては無之候。併し御兩親へは、恐らく御悟り遊ばしたる樣に見へも致し候へ共、御兩親へも又た一言の斯る事を物語り等は無之候へば、慥かにそれと、相知れ不申候。されば私も始の程は孃樣を御慰め申候爲めに、三郎樣も今年の夏は乾度御兄上樣と御一所に御歸り遊ばすなどと、申上候事も有之候ひしも、却て御機嫌に觸れ、悶へ苦み給ふ事、一層烈しく、御成り遊ばし候へば、後には、一口も左樣の事は口出し不申候なれども、御危篤の容躰に御成り遊ばして後は、御自分で語り、御自分で答へ、御自分で怒り泣き、遂には眼球血走り凄まじき容躰に御成り遊はすと、度々なれば、私は成丈貴君樣の事を御忘れ遊はす樣に、心懸け致し候ひしも、平生の御氣象如何にせん方もなし、只た御最後を見す〳〵待つ樣な悲しとも悔しとも無慘とも申されぬ次第にて有之候。それから丁度、去年の五月十五日と相成り、其夜は平生に勝りて御容躰宜しく、御兩親樣方も御喜び限りなく、始めて安く御床に就かれ、翌十六日の午前三時頃、まだ一家は熟眠に疲勞を托せし其時、孃樣吾を呼起し給ひ、筆紙を取寄せ、何にか御手紙にても認めむとてか、紙に對して筆迄は御取り遊ばし候ひしも、涙は白紙を染め濕すのみ、手も又た慄へて堪へざる御有樣、遂に涙に染みしその白紙を封じて、やう〳〵に貴君樣の御名丈のその御手紙——孃樣は之れを左手に取りて、吾右手の掌に載せ、其の右の御手を以て吾が左手を確かと御握り遊ばし——さて謂はるゝ樣——、と女は涙をしぼり物語り、一層深く入らんとする其時、表の方に母上の聲して、御寺より歸り來られ候。女は物語を殘し、他用に托して勝手の方に立ち去りて候。余も又た泣き顏を見られまじと、庭の樹蔭に入り申候。夕方父上も歸りきての後、女は少々氣分惡しければとて、暇を乞ふて近村なる彼が里へ歸り去り候。彼が生々として櫻色を帶びたる平生の顏に引代へ、蒼ふ白く泣顏を垂れて、門を立ち出で去るを見しときの、余の心痛は如

何に、御推察被下度候。悲しき話、而かも其の話の半を殘して去る。その女を余は最早や引留めん勇氣も無之候らひき。其の夜食事の時、父上はさも面白ろ氣に晝見舞はれし家の噂さをなされ候。其話の中に……吉村の花嫁は中々の器量ものそれにしてもあの家と許嫁けありし河野のお雪どの、今もあらば、一層の見物なりしならむにと。母上は其時、淚をばら〳〵と落され申候。余は此の時慥に女が殘せし物語の後半、白紙の趣旨を解申候。同時に余が神魂は、全く殺され申候。吁、今は一片の白紙、余が手に有之候。世の功名利達は、之れを裂くに足り申候歟。父母親緣朋友の懇望は、之れを裂くに足り申候歟。余の胸中既業に是れを判するの神魂無之候。只だ此の上は至聖至愛なる靈裁を希ふの外無之事に御坐候一片の愚痴平生の知に對して不愧申上候思亂れて意を盡す能はす頓首再拜

月　日　　　雲峯生

迷兒

一

枯れふす草葉　霜さやぎ、
野山のあらし　音たかし。
物乞ふ人を　入れじとや、
戸をば鎖しぬ　しづか家は。
垣のおち葉　ふみしだき、
やみになく犬　こゑさびし。
うさのみしげき　わがまなこ、
くもりはてける　なみだにぞ。
かくもふけゆく　夜半のそら、
さてまよひ兒の　身のつらさ。

二

冬のさむさぞ　たえがたき、
我身にまとふ　うは着なし。
くさ葉の霜を　ふむ足は、
氷のごとく　冷るかな。
いとも身にしむ　脉のおと、
そがわが胸に　打つ時ぞ。
父にはおくれ　母はうせ、
わが親戚こそ　おかりけれ。
われはなりけり　みなしごと。
またおちぶれぬ　まよひ兒と。

三

かつて我にも　家ありき。
われひと度は　父ありき。
いとけなき時　よりすがり、
わが抱かれし　母ありき。
いま在はすらん　いづこにか、
ともに戯れし　兄弟は。
森生ひしげる　谷のうちに、
いぶせき我家　むすびにき。
今はやまばと　すみなれつ、
かなしき音にぞ　なのるなる。

四

わがちゝはゝ　世を去りつ、
とほきくにゝぞ　召されける。
われは此世に　ひとりのみ
のこれる身とは　なりにけり。
なさけもうすき　他人の
しひたげうけぬ　かなしくも。
世のあだなみを　のがれいで
そのうさをとこそ　なげきけれ。

今やわが身は　さすらひて、
まよい兒とこそ　なりにけれ。
ふきまく風は　肌を裂き、
雪はあらしに　交るあり。

五

ふるき衣ぞ　やれにける、
夜半の寒さは　身にぞしむ。
わが身のうへを　かたれども
たえてあらじな　聞くひとも。
わが双親の　ねふるなる
墓のうちにぞ　われ行かむ。
あじきなき身と　なりけるが、
「死」はまよひ兒と　ともなれや。

さなきだに飢餓凍餒に堪えがたき貧民、濃尾地方の如く震災に罹り、究苦更に加はる、其の最も可憐なるを孤兒迷兒の徒とす、九重雲深かき處より微服して民愁を察し給ひし御心に倣ふとにはなけれど時に或は半夜白霜を踏で慘苦を察知す、迷兒孤子の如きに遇ふ毎に殊に情緒の亂るゝを覺ぼゆ其心事を察するもの何人か感なからん、今や漸く向寒の期、

彼等に同情を表し、一詩を作る。ホワイトの作 The Wandering Boy.を讀み感ぜし所亦多し、されば余の此詩に負ふ所少なからず。

余が自ら定むる句讀につきて此に一言せん、蓋し詩に於ては字句轉倒(トランス、ポーズド、チルダー)を用ゆる事多く、句讀明瞭ならずんば意義解し難き事散文の比に非ればなり、例せば本篇一節二、三行、二節九、十行、三節五、六行の如し、句讀を明かにして其章の内に於て意を求めずんば解し難し、是句讀點を定むる必要なり、余は。點を以て章の終りに附し、西洋のピリチドに代へ、點を句切になしてコムマとせん コロン、セミコロン、嘆息點、疑問點等は日本の詩文に於て用ゆるの必要ありや、余思ふ徒に煩雜を招くのみに非ざるかと。

人或は難ぜん、句讀、押韻の如きは詩形に屬して抑も末事なりと、然り、詩形なり、然れども末事に非ず、詩想を貴ぶの餘り詩形を無用視するは誤れるの極のみ、想形共に得ずんば詩にあらず、余は詩想を貴ぶ、然れども詩形に就ても大に考ふべきものありと思ふ。

文學

○所云る詩の實際

詩は實際を貴とぶ事今人皆知れり、但だ今人好んで瑣細鄙猥の事を叙て之を實際と思へり、予が所云る實際とは然らず、たゞ人々の實境實情を叙べて矯飾なき所を指ざすなり、然るに今の人丁壯の歳に在りて好んで衰老の態を寫し、官途にありて專ぱら山村の景を寫す、目の觸るゝにあらず、情の感ずるにもあらず、唯だ古人の語を摸倣するのみ、如此くならば假令ひ其情景見るが如くに寫したりとも、優人の假裝を爲すが如し豈に實際と云ふべけんや(淡窓詩話)。

○至誠と詩歌

歌は幼なかれと古人の云へるは專ぱら心ばへの事なり、左りとて幼なめきたる眞僞せんはあか〳〵なり、幼なきを願ふは眞心を述るを云ふ、有のまゝ思ふまゝを述べよとなり……古への歌の心を考がへ知るには好き程の書物侯へどよみ歌の爲になる書と申すものは頓となきものに侯、只だ誠を立る書を見るが好く侯。儒佛神いづれありとも誠だに立侯へば自づ

から筋通りて姿美はしき歌知らずして出來る也（景樹、桂園師說）。たゞ眞心のまゝを美はしく言葉もて續けんは、天にそむかず、人に背かずといはん歟、（伴高蹊、歌の脉載の論）。貫之が古今和歌集の序に和歌は人の心を種として万の言の葉とはなりけると書けるにて歌の源の事はりは盡てぞ覺え侍るされば古き世の歌は誠に心より出たると見へて其時のありさまは今見るやうにぞ覺ゆ且つ世の盛りなりけるほどは歌のさまと亦盛りなりけるに古今集撰ばれし頃よりは少しく淺はかなるが出來にけり彼貫之と其源のことはりは知り侍りけれども世の勢ひにつれてや古今集に入られし歌には己が心より出たるにあらぬと、見ゆるもまじれり、夫より後ち寛弘の頃よりはまして世の中亂れぬべき兆のいちゞるく知られけるとなれば歌の風にも衰ろふる國の色見へて心にもあらぬ事をよみ出せし多し（國歌八論）。

夫れ歌は人の心を種として讀出るものなれば、我心につくろひたるとなく、すら〳〵とよみ出べし、然ればすなほなる人は歌の心も素直に成るはかたくなに、あるはたはれたる、皆な歌に其色のあらはるゝなり、人每に我心の中のよしあしは知りがたければよみ出れば我心にもよしあしの著く知らるゝなり、さて惡しと思はゞ恥かしければ心を改めてよみかへぬべし、言葉を修めて其誠を立つと、聖の宣ひけるもかゝるとなるべし、斯してこそ人の心を素直にするによろしとなるべけれ。後の風の歌は己が心にもなき甘しうたわれたると、或は無下におろかなるとなども珍らしきさまに言ひかなふるを旨とし侍るほどに心を素直にせざるのみか害をさへ得ぬべく成行めり（國歌八論）內によまするものありて詠み出ると、善き歌よみて人にも見せんと思ひて我と己がかまへてよむと、此二ついにしへ今の歌の分ちにして歌の樣も自から誠あるとわざと詞を飾りて面白からせんとかまへ出で誠少なきとあり、古人に及ばざるはこの所にあり、今にも己が身に感ずるとありて讀出れば、古への歌にも立及ぶべし（深澤叢、國風發蒙）。

總別、歌と云ふものはいづくより、出入するぞと思へば、心の誠から出入するものぞなり（定家、詠歌の大概）。

曇らば世の恨ぞと雲の上に君を諫めて月にすむらん。

隨感

○安產

昔し、豐玉姫、將に兒を產まんとして產舍に入るとき、尊に願ぎ玉ふらく、請ふわが恥かしき姿を見玉ふと勿れと。左れど、尊は不審み掛念に堪へず、竊かに之を覗がへば、姙通正に盛んにて、產婦の苦痛大方ならず、身をもだえて蛇の如く輾轉反悶せられける。

文明は人を優にす、其容易く疾病に感染するは、蠻民の比ひならず。今日の產婦が苦を感ずるの烈しきは、蓋し古への產婦に倍するものあらん歟。左れど、文明は亦た之を免るゝの工夫を發明す。預防治后の術いよ〳〵細やかにして、人の苦を去るの途ます〳〵備わる。婦人科の醫博士嘗て曰く案ぜんより產むは安し、今や產と云ふものは、極めて安全なる自然活動の一つとはなりぬ。

わが妻月に臨み、醫科大學にて診察を請けしに、○○腔見へず、速やかに入院せよと云はる。此は腹を割りて胎兒を拔き出すの治療など施こされんとにてあるべし。誰ありてか當時に於ける其良人が苦痛を察せん。斯て一二日過ぐすうち、定期に先だつ、一週、俄然氣兆し自宅に蓐を調なふ。榊順二郞先生一診后例の如く、周密信切に介護せられたり。初產に似もやらず、難なく最と容易に男兒生れぬ。樓下に居て呱々破叫の第一聲を耳く。快喜亦何人か知らん。

左るにても、案ずるより產まるゝとの易き此度の如きは取分稀なるべし。深く感謝す。

然れど實際、腹を割くの治療を受くる人も多かるべし。兒は未だ知らずと雖ど、現に母の割腹中より出で來る。傍はらに之を見るの半身の人は苦悶何如ん。あゝ、姙婦攝生方の今ま一ときわ備わらんとを祈らざるを得ず。

○うき言の葉

大國主命出雲に在はすとき、何事につけ業々しく鳴立つる、蛙（たにぐく）ありて彼此と風評を聞えけり。昔し漢廷に蛙充滿し、國政を囂々たる喧嘩輕薄の中に亂したる例しあり。實に、いつの世にも頗にくし、いと洒々として廉恥の心なく辨ずる蛙あるぞ、痛ましけれ。小町が歌に、

木枯しの風にも散らで人知れぬ、うき言葉のつもりぬる哉。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

紀伊國屋亦右衛門

山下石翁

貨殖の才と、德を慕ふの心とを兼ね備ふるは至りて難し。經に云く、富める人の天國に入るは駱駝の針の穴を通るが如しと。とは固より難し、左れど爲し難きにはあらず。人の爲に富を欲し、世益の爲に黄金を集めてこそ、初めて德を害せざるとを得、もし我益の爲に金錢を積んと欲せば、之を積むと共に慾を積む也、慾いよ〳〵積もりて德いよ〳〵減ず。

人の貨殖に對するは、紀伊國屋亦右衛門が十万兩に於けるが如くなるべし。理想超然として高く、銅臭之を汚がすに堪へず。斯て初めて君子の貨殖ありと云ふべき哉。柳澤洪園、此事を記して曰く、亦右衛門そのかみ年まだ若かりしころ、本家何某につかへて正直なるがゆゑに、主人是をあはれみ、その方わが家につとむると、凡そ十餘年なれども、明けくれ心を盡し費をいとひ、家業を大切にする志滿足せり。今其褒美として、金百兩のもとでを遣はすなれば、これより何處へなりとも、その方が心に任せ家を持ち、出精して千兩の利益を得ずば、再びわが家へ出入すべからずといへるに亦右衛門は忝く思ひ、かの百兩を受けとりて禮を謝し、いとまをつげて京都に登り、つら〳〵おもふに商の道多かる中に、大商して大利を貪らんとする時は、かへりて必ず損失あるべきと常なりかゝれば、日々に費えとなるものを賣りて渡世とせば小利といへども益あるべし、その中、紙は利の薄きものといへど、日用多きものなれば、唯麁紙のすたるべきをあきなふべしとて、西の洞院に所帯して麁紙を業とし、紙屑を買いて漉かせては賣りけるに、百兩をもと手として三とせばかりがほどに、三百兩の利を得たり。又その金にて廣く家業をなしけるに、また五年に千兩にもなりければ、やがて浪華にいたり主人に見えて、かねて玉はりし百兩を、八とせかせぎつるほどに、千兩にはなし侍りぬとて、主人へ事のよし申しのべたりしに、主人大に賞美し、その方わが家に勤めし頃より、尋常ならぬ志と思へる故に、かくはいひつけたるとなり。こたびはこの千兩を持ち行き、一万兩にすべしとありければ、畏り又五とせをも經ざるうちに、一万兩に倍して、主人の前へいで、吹聽しければ、主人又大ひに賞美してこの一万兩をこたびは

十万兩にして見すべしといへるを亦右衞門かしこまり申しけるは、はじめ玉はりし百兩を千兩にいたし、其千兩を一万兩にいたす迄は、骨折れ侍れども、この一万兩を十万兩になさんと、何の仔細かさむらふべきとて、三とせともへぬ間に、十万兩に倍して來れば、主人その働きを感じてその辛抱、此上は差圖すべきにもあらねどこの度は百万兩にも倍すべくとあれば、亦右衞門答へけるは、十万兩のこがねをもて百万兩にするとは、辛勞するに足らざるなり。さて承り侍りたきとあり。當主家の御身帶はいかほどの御儲にて侍るかと問へば、主人答へてわが身帶にはいかほどゝいふかぎりもあらざるなりといへば、さほどの貯へおはしても、その上もこがねをほしとおぼしさむらふにやといへば、猶ほしとおもふことはいまだ飽くことを知らずといふに、亦右衞門また申しけるは、さあればこのこがねを倍することをば、これを限りとして玉はれかし。我等は命こそ寶なれ、命ありてのうへの寶なり。命なくては財ありても益なしと申す。

かくて、亦右衞門は十万兩を主人にそのまゝ奉り、今日までの事は奉公の身なれば仰せにそむきがたし。今より我身には願ひの侍れば暇給はりて、このうへの事はゆるし給へかしとて、暇乞ひしわが家に歸り若干のこがねを緣ある輩に配り分ち、身帶をしまひ、頭をそり、圓知坊と改名して、大融寺の徒弟となり、京へいでゝ菴室をかまへ、日々に托鉢して、遂に終れり。そのゆかりの者、大融寺に塚を建てたり。石に刻める辭世の歌に、

落ちてゆくならくの底を覗きみん
いかほど欲のふかき穴ぞと

一九

小說

流の葦

右續稿今回より復た掲げんとせしに、此度は雜錄に宛がら小說めきて而も更に悲しくいとも有益なる實事談あり、定めの外の長文となりければ、彼を掲て此を畧しぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

○日本新歴史

乙黒直方氏編著なれど、天野爲之氏が校閲なればにや、前橋孝義氏の日本歴史に甚はだ似たり。極めて大畧を知るには便利なる亦是れ一の開化小史なり。

○支那歴史

前橋孝義氏が此類の著書多し、然れど取分け同氏が長所に成りたる此書は其抜群の作と云はざるを得ず。議論往々鼎軒の口吻に似、反りて殘り惜しと思はるれど、博覽の末に成りて文章一々由り所あり、讀もて行き味少なからず。那珂氏の通史は素より格外なれど、普通中學の用には何如あらん。此度の書こそ先づ其用に當るものあれ。

○文學世界今みゆき
○油地獄
○丸二つ引、新太平記
○基督教新論
○三位一躰の論
○三國音書論

何れも次の號にて批評すべし。

時事

○預算査定案報告

松田委員長報告の結末に云く、昨年、政府は同意せずと云ひて遂には同意したり、故に今年も同意せず〳〵と度々言ひたれども依然斯の如く決したりと。日本政府は、此の冷笑に答へざる歟。渡邊國武氏が尾崎氏に於ける一辨難ありとも何んぞ償ふに足らん。

○鐵道國有

私設鐵道買收の法案出でたり、是に最大問題の一なり、深く考究するとを要す、然れども吾人は必らすしも之を本年の議會などに提出するとを要せずと信ず。

○勤儉尙武

惜しひ哉之を二つにして建議せざりしと。其一に同意するものも不幸にして併せて賛成すると能わざりしならん、貴族院に珍らしき美ある建議案の消滅に歸せしを弔す。

○ニコライ氏

當に尙早く大口を開くべかりし也、左れど湖南事件の事后承

認未だ決せざるの今日、三十年來の在留魯教師が、二國愛交の爲めに一言を呈するは極めて至當なり。

○鳥尾得庵居士

例の如く壯んなるを賀す、たゞ前年伊藤伯議長の折、との活辨ありたらましかばと、そゞろに今こそ殘惜しけれ。

○谷干城子

加藤弘之君の一駁、理なきにあらず、然れども施政の方針に付きて大體大勢の論を寄せんとには、自づから漠然たらざるを得ず。吾人は深く谷君に感謝す。貴族院内君あらずば夫れ何人より此の福音を聞かん。

○解散

本年の議會何をもてか解散せられん、見よ〳〵其末路の調和を、吾人は寧しろ賀せず。

○二伯

板垣大隈の二伯は曰く、解散せらるれば起つて雌雄を決せんと。二伯の勇氣太はだ感ずべし。左るにても伊藤井上氏等は今何處に座はすや。

女報

可愛子編

●大地震に付ての女報（其　）

●皇后陛下の優旨　愛岐兩縣下の震災に付、皇后陛下慈仁の御主意を奉じ負傷者救護のため出張せしめたる日本赤十字社醫員看護婦等は、救護の實効を奏して去る十一月三十日限り歸京の趣聞召され、本月九日右出張員一同は皇后宮職よりの達に據り、醫員非職二等軍醫正山上兼吉氏同伴して午後二時出頭したるに、香川皇后宮大夫より一同に對し、救護方盡力行屆候段御滿足に思召給ふ旨を口達し、尙出張看護婦一同の盡力も奇特に思召され、又本社及び病院等在東京の諸員に於ても夙夜鞅掌供給機を愆らざる段御滿足在らせらるゝ旨等を口達し畢りて、出張諸員より災民治療の實況を開陳する事一時間半に及びたりしに、香川大夫、三宮亮共列席にて之を聽取り、具さに奏上に及ぶべく旨にて、各御菓子一折を賜ひ一同非常の優遇に感佩して退出したりと。

●小松宮御息所の諭旨　彰仁親王殿下御息所には日本赤十字社篤志看護婦人會幹事長の資格を以て去る十一日同病院に臨せられ、豫て尾濃兩地方震災負傷者救護として醫員に附隨し同地へ出張したる看護婦一同を召され、一同が其出張中晝夜別なく　皇后陛下の御仁惠を奉戴し以て病者に接し、深切懇到能く救護の實効を全うせし段奇特の旨、賞詞あらせられたり。

●福島縣耶麻郡育兒會の慈善會　瓜生岩女史の發起にて尾濃地方震災救助の爲め去る二十四五の兩日間福島縣下喜多方町に婦人慈善會を開きぬ、二十四日の賣上高は六圓餘にて當日小池郡長の妻女より金一圓を寄贈し、翌二十五日も同樣開店前日に增し賣高金七圓餘、此日若松二ノ町養蠶場內某氏より金五十錢を同會に寄附し、午後五時閉會を告げ一同事務所に引揚げたれば岩女史より懇篤なる晩餐の饗應をなして其勞を謝し尙ほ不日上京の上今回の摸樣を詳細に各貴婦人へ披露すべしと物語りて退散せりと云ふ。

●大坂耶蘇教會の孤兒救育　同地伏見町二丁目約輪婦人會附屬大坂育兒院にては、今回取敢へず岐阜縣罹災の女兒三人を撰擇して救育せんとて、目下岐阜縣廳の手を經て引受くるの手續に取掛り居る由なるが、その撰擇は中等已上の生活を爲すの者の兒にて孤となりたる者は、艱苦の程も察せられ、且つ將來にも大に望あれば先づ之を急にし、一方には江湖の慈善者に義捐品を募りて、三十人位を引取りて救育せんと專ら盡力なし居る由なり。

●吉森梅子の盡力　京都市四條通油小路東へ入り吉森四宮氏の妻女梅子女史は、京都佛敎法燈會の女子部長にして慈善の聞へあるよしなるが、同女史は今回濃尾地方の震災を聞くや直に人を馳せて實況を視察せしめ、猶ほ又現狀を寫せし寫眞數十葉を取寄せ幻燈器械を購ふて各所に幻燈會を開き、自ら說明して義捐を募集

したるに每夜聽衆數千に達し見るもの袖を濕さゞるはなかりしが、斯くして夥多の金品を募集したれば、此程該金品を携へ自ら罹災地に臨み罹災窮民一人に就き衣服一領金十五錢づゝを數百人に配興し、猶且つ死者の爲めに大垣町長勝寺に於て追弔法會を執行し、女史自ら一場の演說を爲し參詣の人々には餅又は菓子を施與せりと。

●看護婦の義捐　麻布聖慈堂病院なる看護婦二名より金五十錢を震災地に義捐せり。

●香蘭女學校　麻布永坂町なる同校中學科小學科生徒有志者より金四圓五十五錢、同校傳道部生徒有志者より金一圓十五錢を震災地人民に義捐したり。

●甲府女學校　より古着一包を震災地に向け義捐したり。

●越後高田女學校內王女會　にては早くも金三圓を震災地へ義捐したり。

●少女の義捐　三重縣伊勢國津教會にては、岡山孤兒院が震災地より多數の孤兒を救助すると聞き、教會員武永鉄之助氏等の盡力にて、古着及び金員を募集して同院に送りたり、右寄附金に付て一の美談あり、有志者はなるべく物品と共に金員も幾許か寄附なしたき志あれども、既に震災救助の爲め應分の義捐をなしたる後なれば到底行はれざるべしと斷念しありしに、こゝに一信徒の家に本年九歲斗りなる少女ありしが、かれて祖父母等を按摩し貰ひ貯へたる金四十錢斗りありたり、孤兒院の事を聞くや其內より廿錢を惜氣もなく義捐せり、之を見聞する大人は大に感激して各出金なしければ豫想外に壹圓九拾錢の金を得たりと云ふ。

●宮津基督假教會の義捐　去月廿八日の震災報道至るや何地も同じ事ながら、宮津基督假教會にては傳道師の不在中、婦人會員僅々二十四名は一同大働にて東奔西走戶々に付て今回の事を吹聽し、襤褸と新衣とを問はず貰ひ受け、或る者は之を洗濯し或者は之に糊付けし、或は裁縫の勞を取る抔夜を日に續ぎて從事せしかば、日ならずして四百餘點の衣類を整理せり、時會々傳道師歸宮し震災者の爲め同情演說會を開くことに決し、去る十七日午後七時より開會し、來衆三百餘人一同淚を以て聽聞せり、此間婦人會員は新作の唱歌及軍歌を唱し、淚と共に大喝采を博し、數名の聽衆は直ちに金圓を義捐し、或は衣類を約したり、滿足なる結果を得て午後十時散會せり、此日會員一同は其費用を減ぜんが爲め種々の勞を取り、或は下足番し、或は婦人自ら輕運車にて送附の衣類を運搬する抔、實に能く勉めたり、今尙續々衣類の申込ありて已に六百點の多きに達せり、不日他の義捐金と共に彼の地に發送の筈なり。

●震災地へ義捐　長崎市大浦東山手なる梅香崎女學校と東山學校と長崎日本基督教會よりして金四十四圓三十錢を、震災地に寄贈したり。

●各婦人會の義捐　東京婦人矯風會よりは金四十九圓四錢●上州安中教會の婦人會よりは金十圓●同原市教會の婦人會よりは金四圓●長岡婦人會友中よりは金三圓●肥後國佐世保港基督教講義所及び婦人會よりは金十圓を、何れも震災地へ義捐したり。

●伊豫松山よりの義捐　此度の震災に就ては教會安息日學校小兒女學校とも義捐金を募集し該地の新聞社に托して送附せり○女學校生徒は古ギレを集めて二百點以上の衣服を仕立たり、又四才の小兒にして已が父母兄弟の金品を義捐するを見て自ら感じたるものと見へ、父母兄弟の勸誘なきに已が最も愛玩したる物品を捧げ出したるあり、或は每日の菓子を廢して金を送るあり、又或る貧しき生活をなす家の娘にして每日一飯を廢して金を送るもありし○幻燈音樂會の節其散會せんとするとき、誰やらん自ら着し居たる襦袢二領と靴下一足を投じて去りしものあり、其襦袢を投じたる時尙溫氣を保てるを以て自ら着し居たるものなるを知る。

●大地震と監獄の婦女　今回の大地震に愛知縣の監獄に於ては、女監四棟、女工場二棟破損したり、在監の婦女百五十九人の中、即死六人、輕傷十二人ありたり、吏員にては女監取締一人重傷を負ひ目下尙治療中なり。

●皇后陛下婦人慈善會に行啓　同陛下には去る十二日山下町なる婦人慈善會に行啓あらせられ、第一區より第六區まで順次御巡覽ありしが、第一區にて早くも御目を注がせ給ひしは岐阜愛知震災地の寫眞にて、陛下は一々之を御手に取上げ給ひ、受持の各婦人より親しく其說明を聽かせ給ひ、夫より一區每に二百圓づゝ御下賜ありて、數多の品御買上遊ばされ、暫時御休憩の後御還御あらせられたり。

●皇后陛下の御風氣　皇后陛下には昨今御風氣に渡らせ給ふ由、一日も早く御平癒を祈り奉る。

●結婚式と披露の賀宴　閑院載仁親王殿下は今度公爵三條公美氏の姊知惠子と結婚の儀を願ひ出でられたる處勅許在せられたるに付、來る十九日の吉辰を卜し洋風の結婚式を行ひ、終りて赤坂離宮に於て諸親王并に妃殿下各大臣夫婦其他貴顯諸氏を招待して右披露の宴を開かるゝといふ。

●皇太后宮の御永住を請願す　京都の保守主義者百有餘名は、皇太后陛下の京都に御永住遊ばされんとを請願せんと、此程より協議中なりしが愈よ京都府廳を經て宮內大臣へ請願書を呈出し、尙は陳情のめ爲二名の總代を東上せしむるとに決したりと。

●御代拜參向　光格天皇祭に付宇田主殿助は天皇陛下御代拜として本月十二日泉山御陵へ參向し、皇太后皇后兩陛下にも女官を差遣はさる。

●學生注意すべし　神田本鄉芝區の如き學生欝集の地は昨今老婆一人と容色美貌の娘を置き、同居人として學生の止宿を爲し、學費を欺取し或は其婦の懷妊を名とし、種々の手段に依て金錢を貪る者多しと、

●道德掃地　前日新橋の娼況政治新聞に上り、嗚呼德義の敗頹一に茲に至るか。今復た外妾の給金各紙に由りて報ぜらる、新聞紙の品位を下す尙可なり、國の品位を墜す夫れ之れを奈何（東京日々新聞）。

●品風　猛威を逞くして落花狼藉…骨牌竇れず、繪畫草紙屋泣く、社會は之が爲に賀す。（東京新報）。

●某所の奴輩　將に讌を畫して娼妓無年期商賣繁昌貸座敷万歲の祝宴を開かんとす白晝魔鬼橫行到此極矣、社會道德之制裁遂如何。（同）。

●女子學院の慈善會　は來る十九日午前十時より午後七時まで開く、收入金及び寄附金を以て濃尾罹災者の救恤に送り、其幾分を割きて府下の貧民に推與し、又同院に必要なる書籍室設置に宛てんとす。

●神奈川縣廳の取締　近來よく行き屆きて嚴重なる爲め、殆んど密行婦女の跡を

絕ち、僅に男子三人の密行者ありたるを取押へたる位なりき。

●松田キタ子の追悼會　ガードチル女教師に隨從し去年來三重縣地方の傳道に熱心盡力せられたる同氏は肺患にかゝり、本月七日京都に於て永眠せられたり、因て本月十五日津教會に於て追悼會を催しぬ、生前同氏の導き居たる未信の婦人だちも多く來會あり、其履歷を聞きて感涙を流したるもの多くありたり。

●谷口花子の永眠　同志社看病婦學校第四回優等卒業生にして當時同病院に被雇日夜己を捨て忠實に看護の業を執られたる谷口花子は、去る十月下旬より腸チビス症に罹り、入院治療せしも其効なく、十一月廿六日午後第一時就眠せり、享年二十有五、遺族は直に假葬し、更に廿九日平安教會室に於て正葬を行ふ、會する者一百餘人。

●玉成會の組織　加藤京都尋常師範學校長は京都府下女教員及保姆等にて往々不品行の醜聞あるを慨し、其風俗を矯正せん爲め此度玉成會と云へるを組織せんとて過般之が發起人會を開き、師範學校内其他に於て贊成者を募りしに、目下已に上下京區に於て五十餘名の多きに達したるを以て不日總會を開き其規則を制定する筈なりと云ふ。

●裁縫所設立　靜岡縣城東郡相草村猿渡の龍泉庵内に女子教育速成裁縫所設置せられぬ、去六日を以て開所式を行ひたり、仝所は裁縫の傍ら禮儀作法等總て女子の心得と成るべき事を教授する筈なりといふ。

●幼稚園幼兒の墓參　靜岡縣下に於て幼稚園の創立者故高橋久敬氏は、多年靜岡高等小學校に奉職し、同校附屬幼稚園の主幹たりしが、氏が生前同園の事に盡力されし事は人々の知る處ろにして、同園は氏の爲に生れ氏の爲めに成長せしことなるを以て今回氏の爲に近藤有渡安倍郡長高等小學校長綾部園主松山鎰子の三氏相謀り、靜岡市下魚町の寶臺院境内へ高橋氏の墓碑を建設し去る四日右の墓碑落成したるを以て、同幼稚園の幼兒一同は其翌五日保姆附添ひ同墓所へ參詣したりといふ。

●進德女學校　香川縣下の同校にては山崎エイ子に教授を托して以來教則校則等に改良を加へたる由なるが、爾來入學申込日に增すの勢あるを以て、各郡よりの入學者の爲めに近傍に寄宿舍を設け、山崎教師同宿して父母に代はり監督せんとするの計畫なりとか。

●山梨基督教婦人會演說　は去る九日甲府教會にてあり、ミスウイントミユート、ミスプレストン、金子仙子、山中笑諸氏演說せられぬ。

●女教員美服を着けて女生木綿縞を嫌ふ　是れ高知縣高岡郡某高等女學校に於ける事なりと土陽新聞は記せり。

●密娼防禦策　空漠山人てふ人あり福島新聞に投書して曰く我れに一策あり密娼に防禦すべしと、うは左の如し、

○凡そ藝妓たらんとする者は三十年以上の者たらざる可らず○料理店飮食店の雇女は三十年以上の者たらざる可らず○男子にして密娼を弄したる者は一ヶ年間公權を停止す○女子にして密娼をなしたる者は婚姻することを禁ず○父母にして其女に密娼を營ましめたる者は父母たるの權利を剝奪す。

●愛媛縣通常縣會にては　同縣尋常師範學校女子部廢止の建議を可決せり。

●長崎縣下の女學　昨年末の調査によるには同縣下に於て、小學校に於ける女教員は二十八人あり●師範學校の女生徒は三十五人、卒業生は十二人。附屬小學校の女生徒は二十二人。附屬幼稚科の幼兒は男十九人、女十五人にして、女子部生徒をして其保育を實習せしめ、訓導八人、雇教員一人を置き專ら保育の任に當らしむ●幼稚園は師範學校附屬幼稚科の外、長崎女兒小學校及び諫早女兒小學校に附設せる者二あり。

●沖繩縣下の女學　同縣下學事の情况を觀察するに、民心の教育に傾くこと逐年深きを加ふるが如し、昨二十三年の調査によるに、就學男八千七百三十四人にして女は二千二十四人、前年よりは男千四百七十六人、女三百二十七人を增せり、女兒就學の最も少きは、同縣元來女兒の就學を度外に置くの習慣なりしに由る、普通教育施行以來百方勸諭し漸く近年に至り就學の端緒を開けるとぞ、昨年女兒就學人員を男兒に比例するに男百人に對し女二十三人五分九厘に當り、前年よりは九厘を增せり。

●靜岡縣通信　◎私立靜岡女學校は、來明治二十五年一月より大に規則書を改正し新たに國語、女子作法、唱歌、造花、婦人衛生、育兒法等を加へたり、又同校には漢文、英語、數學、音樂、習字、裁縫、手藝等の別科あり、務めて家政上女子の必要なる藝能を授くることとし、又學資をも減じ、入學者の便利を計る由。◎靜岡尋常師範學校女子部生徒は、各自の寢衣古着類を取纏め、愛媛震災地へ義損せられたり。

●宮城縣通信　◎諸學校の學期試驗　松操學校は去る十一日より試驗を始め、受試卒業者は尋常科二十三人、高等科十三人ありたり。彤管私塾は同十二日より試驗を始めぬ。◎女教員免狀　尋常師範學校女子部舍監兼教諭なる山盈女史は、家事科の教員たるべき免許狀を文部省より受けたり。

●ロンドンの貧窮人寄隱所　は一千八百〇五年、我が文化三年（今より八十六年前）に設立され、貧窮の婦女又は女出獄人にして年齡十五才より二十五才までの者七十人を容る、工業は洗濯及び簡易なる針細工なり、又其最も多人數を容るゝものはグラスゴー、ホワイトザエール、ミツシヨン、シエルターと稱するものにして一千八百七十九年に設立し、女出獄人及貧窮の婦女合せて百名を容るゝに足るといふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●結婚の約　クラレンドン公がテックのヴイクイリヤ、マリ内親王と結婚の約整ひし旨公布せられたり（十二月六日倫敦發電報）。

●袁世凱氏　氏は母堂の病を患ひ天津に在りても絶へず、電報にて容躰を問合はせ又頼み置きたる日本醫員へは日々の如く書を致して病勢如何を質問し居る由、氏は母堂の病氣如何をもつて歸任の遲速を決する筈なりと。

●王妃殿下　大院君孫女の爲に祈禱をなす、近來同孫女はいよ〳〵病患危篤なるをもつて、王妃殿下は同邸に巫女を遣はし平癒の祈禱をなさしめらる。

廢娼記事

●山梨縣下の景況　●縣會に差出したる公娼廢止の建議書　は山梨日々新聞の附錄として廣く公衆に知らしめたり。

●帝國議會への廢娼建議書　は略調印濟とはなりたれども未だ全からず目下募集中なり。

●存娼の陳情　新柳町三業取締所副頭取中村齋は中嶋知事を其私邸に訪ひ存娼の儀に付陳情する所ありたりといふ。

●單獨存娼の運動を爲す者は〇〇〇〇なり　と二號活字に周圍に、ワクを附けたる廣告を新聞紙上に出せる者あり、甲府新聞は記して曰く……は〇〇〇〇壯士にして特に同志を糾合するにあらず其得意たる單獨の運動に依て大に決心を示さんと物語りぬ廢娼論者も薄氣味わるからんと、吾人は呆然として其奇々怪々に驚く、廣告する者も、廣告を出す新聞紙も、はた又斯の如き記事をなす新聞紙も、たゞ〳〵呆れたりと評するより外なし、知らずや廢娼論者の膽は恐嚇迫害等に戰慄する者にあらず、若し恐嚇に驚き、迫害を恐れば、はじめより社會改良の運動に着手せざるべし、ソレ自己の心を以て他を論ずるを止めよ。（因に云ふ吾人が斯る壯士の名を記さゞるは神聖なる紙面を惜むが故なり。）

●長野縣下の景況　●信州に於ける廢娼演說會　去る七日城山館に開きぬ當日の參聽者は七八百名の多きに登り流石に廣き全館も殆ど立錐の餘地だになかりし、聽て木下尙江氏演壇に現はれ持論を開陳し、尋で佐久間舜一郎氏最後に平岩恒保氏の細密なる廢娼論ありしが、參聽者の三分二以上は總て拍手喝采の間に廢娼贊成の意を表したり、而して偶々妨害者らしきものありて會場を騷がせしが取締警官の注意する所ありて無事閉會を告げたるは既に深更の頃なりき。

●福嶋縣下の景況　●存娼論化して賦金廢止となる　福島縣會に於て、來る二十五年度より五年間を期して廢娼するとに可決せしより、妓樓の主人等は大に驚き、存娼論を議會に出さんとせしが、到底其無効なるを悟りたるにや、たゞ賦金廢止の議を呈出せんと定めたる由。

●新潟縣下の景況　●公許賣淫禁止の建議　新潟市郡有志者は愈よ去る九日を以て加藤勝彌氏外二百七十四名の連署にて縣知事及縣會へ公許賣淫禁止の建議書を提出たるよし。

●鹿兒嶋縣下の景況　●町拍子の三弦を止めらる　先頃鹿兒島縣會にては娼妓と遊廓外の白拍子を廢止するの議を可決せしより、妓樓及町拍子連は大いに驚き町拍子（即ち遊廓外の白拍子にして料理屋に抱へられ居るものにて同地にては之をお着屋藝妓といふ）初子、一蝶の兩拍子六十餘名の惣代となり、山内同縣知事へ陳情書を呈出して廢止議決の認可なきやう嘆願せしも、知事は之を容れず去る九日斷然縣令を發して藝妓は同地の遊廓の門口、築地の兩地に限り其他の町藝妓は三味線を彈く事を禁じたり、但し娼妓廢止の件は未だ認可あらざる由。

品名	十二月十七日
白米（一円ニ付）一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇五
四等米	一〇八
五等米	一一三
正米（一円ニ付）本穀米	一斗四升九合
南部米	一五一
磐城米	一四三
行方米	一三四
土浦米	一四〇
雜穀（一円ニ付）本貫大麥	二斗九升〇合
上州小麥	一九〇
竹林豆	一八五
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	一九八
吟小豆	一七〇
白胡麻	一一八
黒胡麻	一五五
鹽（一円ニ付）赤穗	三、二五
大鹽	三、三五
本齋	五、二〇
新齋	五、八〇
醬油（一円ニ付）最上・極上・上物・中物・並物	七分五厘　九五　八七　一、一〇　一、二五　一、五五　一、七二　一、八七　二、〇五　二、五〇
味噌（一円ニ付）地製上白	六、六〇〇
同上赤	六、六〇〇
同紅赤	四、一〇〇
眞綿（一個ニ付）上々入金	一一八、〇〇〇円
上入金	一一三、〇〇〇
並入金	一〇六、〇〇〇
松入金	九五、〇〇〇
竹入金	九二、〇〇〇
梅入金	八七、〇〇〇
繰綿（一円ニ付）新本坂上銘大入	八〇〇目
新坂上銘大入	八一〇
新三上銘大入	八六〇
新三文庫入	九四〇
新尾文庫入	九二五
地綿文庫入	九四五
白木綿（一円ニ付）玉鶴	三四八反
綾鶴	三七八
日の出鶴	四〇八
若柳	三〇三
稲岡	三三八
蓬莱	四〇〇
改メ	三三八
間銘	三八〇
古新	三〇五
造り	四〇五
濱縮緬（百目ニ付）大巾上馴	五円、〇〇
小巾百廿目立	五、六〇
同並物	五、〇〇
六丈絹猩々紅	
五十目立	五円、九〇
糸吉生絹（一円ニ付）六十目附	二八、〇〇匁
七十目附	二八、〇〇
八十目附	二九、〇〇
百目附	三〇、〇〇
製茶（一貫目ニ付）山城江州稀大頭	二、五五円
同稀頭	二、一〇
同大頭	一、七五
同中頭	一、四五
同中茶	一、二五
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七三
同大頭	一、四五
同中頭	一、三〇
同中茶	一、〇五
鰹節（十貫目ニ付）土佐上	二四〇、〇〇円
薩摩大	二〇〇、〇〇
伊豆上	二四〇、〇〇
城の腰秋	二一〇、〇〇
房總夏	二一〇、〇〇
銚子上	一五〇、〇〇
乾海苔（百枚ニ付）洲崎上	九五錢
大森上	九五
深川砂村上	九五
大師潮田上	七五
上總上	六五
水油（一樽ニ付）地水	七円、六三
胡麻油	九、九〇
荏油	九、八〇
桐油	五、五〇
綿油	七、五三
坂水	六、六〇
石油（一箱ニ付）チヤスター	一円、四八
デボース	一、五一
ホーキ	一、五〇
ロシヤ	一、五三

震地傳道隊報告

婦人矯風會、録

○震地特別通信

（第五報）

震災後の惡疫

藤井米八郎

古昔より天災地變戰爭洪水等のありし後に饑饉惡疫のありし事は歴然世に傳りて知る處なり近くば西南の役に於ける十一年度のコレラ病流行の如き亦十八年大坂の洪水の後のコレラ病の如きも其例なり余は或醫師に聞く晩秋寒氣漸く肌を犯さむとする時一朝創國其比なき震災を降す幾千万の人民雨露を凌ぐに家なく坐するに床なく着の儘逃れて今や嚴冬霜雪は手足も尙氷らんとする時僅かに破戸を圍み路頭に寐處をかまうる者其幾莫なるを知らず其最も甚しき者は貧民小家と稱して菰莚にて圍みたる長家に數家族同居し雨雪の時などには雨は洩れ雪は吹込み其慘狀目も當てられぬ有樣なり殊に美濃は沼澤の地多く一二尺掘れば泉水湧出し濕氣甚だしく之が爲め明年解氷の候には惡疫の蔓延するの萌芽ありと聞き慄然たり嗚呼皇天斯くも此民を罸し給ふ乎此民今にして若し悔ひ改めざれば終に此淫惡浮薄の國を亡し給ふべし豈に戒心すべき事ならずや聞處に由ればチフス、セキレ、コレラ病ならんと果せるかな昨夜左の如く悲しき電信に接したり（岐阜午後發）

テチタニ、チフス、アリ、イシ、ヒツヨ、クルカ、ヘンシ

此報に接するや余は即夜竹が鼻に至り我傳道隊の特派醫學生中村友吉氏に根尾谷派遣を囑托せん爲め仕度せしも夜深けて舟渡しの懸念あれば止まり今朝車を驅りて竹が鼻に至る余が竹か鼻に到着せんとする時中村氏旅裝を整へ人車を驅り大垣に來らんとするに出會たり氏は竹が鼻を引揚余等に來らんとせし處なり直に電報を示し根尾が谷に派遣を囑托す氏は即諾直に岐阜を輕て根尾谷へ赴けり氏は決然凜々たる勇を奮て惡疫流行地に行れたり請兄姉よ氏の爲祈れ

孤子救濟

孤子の救濟につきては大に尾濃の官民の注意をひき多くの感動を與へたり岐阜邊にては警官力を添へて孤子を集む昨今警察所に多くの孤子を集め當分同處に養れ他日岡山孤子院にて引取らん目下今尾高須にて募集せられたる小橋氏の孤子と併せ五六十名岡山に歸らる

佛教黨の運動

佛教黨の運動に就ては先報に少く通知したるが如く此頃大坂婦人慈善會の寄附にて大坂に於て切組たる七間に十五間の堂宇を昨今滊車便にて續々送り來り今后五日間に此堂宇を建築する由にて職工數百人送れりとの說あり亦た本願寺の大坊主來りて御剃を無代價にて授るとて數里の在鄕より當地へ群集し爲めに人死する程なり

佛堂寄進の爲め公賣處分を受

本願寺新築には尾張美濃に於て信徒が出したる金額は莫大なり同寺の天井を濃州の信徒が寄進せしに其戶別割極貧者も尙一戶に金六十錢餘かゝり夫が爲めに公賣處分を受ても此寄進を果すと本願寺の金庫の名空ならず

京都市民の救恤

柿のへたと狂名する京都市民は義に勇む江戶子の鼻を柱たり府知事初め市民一般に於て貴婦人より藝妓に至る迄力を併せ手を盡し消毒法を行ひ物品は積みて荷車に七拾臺之を大垣に贈れりと郡長は之を舊城の天守に積入られたるに天守は之が爲に一杯になりしと郡吏永田正敏君の直話なり

貧民授産

目下數名の貧民は假職工場永田氏の二階にて竹細工同籠など製造し居れり追々家屋の新築するに從ひ貧民を募りぬ

今尾の救恤

此地に於ては先年來破邪會と云へる團躰を置き處の坊主外教を防ぐの考より成立勢甚だ鋭く外教の黨一人も此地に入れずと廣言せし程なりしが今般の震災につき假病院を設け之れに信徒醫學士百瀨良岱氏、高瀨いせ子など治療看護力を致せしにより此土地の人民平常に坊主が種々の名を付け金錢をむさぼり万一の時には何事をもなさずと大に民心激したれば坊主は居たまらず何地へか身を隱せしと故に此地は將來好望の傳道地なり。

十二月七日

（第六報）

震地傳道隊の一人として東北學院より松田順平氏伊勢四日市を經て昨日午前七時頃到着せり氏は貧民授產などの事業には曾て經驗あるの人にして熱心に此事業の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

爲め働かんと語らる追々神は天下の義人を起して我黨の群に加へ入れ給ふを感謝す

藝妓震災に懼れ名古屋に歸る

大垣に於ては八拾三名の藝妓名古屋より出働せしが今回の地震にて或は二人或は三人四人と壓死せしかば辛く死を免れたる藝妓等大に懼れ三々五々名古屋に歸り今は大垣に止まる者四五名に出ずと亦大垣は他に例なき異風あり遊女屋が各町内に一二軒ヅヽ雜居し居る事なり亦之れ等の妓樓は今般の地震に殊に甚しき災害を蒙れり

古田くに子氏

大垣病院の求めに應じ我傳道隊より派出されたる看護婦古田氏は働き上好都合にて滿足して主の愛を數き居らる此病院にては氏の手にて間にあひければ今分の處にては此地丈は更看護婦を要せずと

今尾行

余は今朝午前八時川舟便にて今尾に赴きぬ本日は伊吹山降しの寒風非常に寒く感じたり此川筋は其水源根尾が谷邊を經て來るものありて過日來の雨雪にて水嵩み其水の色は恰も味噌汁の如し乘合の舟客が咄しにては信濃飛彈より根尾が谷に來る川脈は土岩の崩れ落つる爲水脈を變じ亦多くの土砂を流し居れば明年雪解の頃は大垣近傍は如何なる水害を及ぼすや知れずと實に美濃全國にて堤防を破損する事百五十里計りなりと此堤防は到底明年入梅の候迄には修繕期し難し心ある者は之を想ひ居れり殊に大垣の如きは甚だ底地にしてイビ川の如きは川下が反て地面高ければ一度堤の破る時は川下の水を逆流して大垣に浸入すると云故に大垣の住民は救濟の金にて受けしよりは堤防の堅固なるを望む者ありと亦聞處によれば今尾邊にてはイビ川に海潮のさす事平常より一尺五寸位高しと之れに因て見れば此邊一般の地處以前よりは一尺五寸も落ち入りしにはあらざる乎と云へる者あり假に信じ難けれど兎に角海潮の當みたるは事實なりと暫く記して識者の説を待つ而して舟は十二時頃今尾に着きぬ此地は非常なる震災を蒙れり

今尾の假病院

聞けば假病院は學校の崩跡と敎ゆ舟着場より二町程堤を傳ひて右に降りたる日當りの宜き處にて撫にて宗根を葺き莚に戸障子などにて圍み凡拾五間計の病院あり目下九名の患者入院す其他治療處コーク處部屋の如き者總て四棟程の建小家あり此病院長は信徒醫學士百瀨貝岱氏之に當る氏が此處に開院されたるは十一月十七日なりしと其以前は處々より寄り集りたる人々が或は三日或は四日と療治され最初來られたるツリストラム氏の如きも二三日にして引揚られたりと聞く此病院にて初めより治療を加へられたる人員は今明に知り難けれど概略千名以上ならんと云此地の震災は岐阜大垣に比して餘程强烈なりと雖も幸に火災を免れし故兩町より幾分の僥幸なりしも患者は割合に多かりしと而して此病院には大阪より高瀨いせ子村上さと子の兩姉妹看護に來居ると聞きぬれば慰問し參らせん心なりしが兩姉妹は昨夜十一時歸坂されたりと聞き失望せり、日下百瀨氏は一の宮へ行れ歸路縣廳に至り看護婦一人差向を依賴さる由氏の不在中は當地の開業醫中源頂吉氏代療せらる

今尾の町役處を訪

村長は不在書記松澤維氏代り面悟さる當地民度風說上につき聞き且つ注意を促し說たり氏曰當地は明治十八年以來度々水害を蒙り加之同年より豐收の秋に廻り會ぬる事僅か二度農民委く勞れ殆ど饑渴にせまる者幾百人と而して當地は大垣岐阜と異りて博愛家の惠みに洩るとも聞く余他日此地に衣類を贈る事を約し廢娼の事孤女救育などの事を述へ辭きて去る

高須假病院

當町は人家七百計の小都會なり震災も今尾に比しては甚だ輕少なり潰家などは數百程なり然し其當時は今日の如くならざりしならん然れども患者は其割合には多かりしならん此地の假病院は今尾と同樣なる仕かけにて院長は名古屋鎭台の一等軍醫田中類五郎氏なり看護婦は大坂川口傳道學校の二姉妹當らる亦當町の聖公會員にて手傳居らる人あり目下入院患者拾三名計なりと

高須の警察へ出署す

警部某氏に面會し孤女救養賣女防止に付縷々陳述し注意を請ひたり警部は我黨の旨意を贊し及的助力すへしと云へり

十二月九日　高須にて　藤井米八郎

（第七報）

孤子救養に付愚民の流言

高須にては村田里小梅勝之助氏等拾數名の孤子を連れ歸り東京岡山に送れり之れに付此地の頑民種々風說を流布し甚だしきは耶蘇教は女の子を廿才位迄養育して後之を外國へ賣ると外國は内國廉價の比にあらず一千圓二千圓の高價に賣れると

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

斯く傳播して盛きに二氏が集められたる孤女の父母なる者は（孤子と雖ども父母何れか一人の親ある者あり）大に愕き取戻さんとせり然れども警官の說諭にて安心せしもあり亦竹が鼻などにては佛敎黨が種々惡說を釀造せし故殊に集められたる孤子續々取戻しに來り二日間にて拾三名迄連れ歸れり、東本願寺の法聖とか云へる僧は名古屋より竹が鼻を經て高須今尾大垣へ來るとて中々の人氣にて其の勢力は非常の者なり

高須の看護婦

大坂川口拾七番女子神學校篤志者、光安たき子、濱條ゑさや子の二姉妹は此后尙永く當病院に於て看護の勞を取らる由に聞

今尾の救濟

余今尾の實況を村長に就て聞き歸垣の上之を同志に語る皆贊成して衣類を供與すべしと右につき明日我傳道隊の松田順平氏數百の物品を携へ明日今尾に行き主の名により之を與へらる

堤防の修繕

堤防修繕は大に縣廳に於て急務とし各村々にて請負せり亦伊勢飛彈等の近國よりも入込働き居れり其人足賃を聞に手前辨當にて一日金廿五錢迄なりと近來の上手間なりと云へり

宮崎利道氏の歸垣

氏は大坂神戸兵庫及京都へ資金募集の爲其他同志者へ種々打合せの爲め歸坂されしが至る處大に贊成を得且各地の人心を動せりと資金も意外に集り尙續々寄付者も少すと

將來の運動

將來の運動上所謂三大目的に付西京大坂同志へ打合せの爲出府せし處の宮崎氏は既に歸垣し亦佐々木氏は今晩歸垣さる筈なり最早運動の方針も確定せば今後謹て神に祈り大に成さんとす猶亦余は明日竹が鼻より笠松を經て岐阜に至り有無相通じ此際引揚る場處もあれば后事の打合などなし置かん考なり且成べく村落に於て惠みに漏れたる處へは物品を送りたし

佛敎黨の孤子敎育

基督敎徒が孤子を救養するにつき京都の佛敎徒も亦同樣の運動を各地に初めたり余は彼等に告ぐ名古屋には僧侶の私生子多しと聞彼等何故之れを先きに救養せざる

十二月十日　　大垣救恤事務處　藤井米八郎

〇避病院の方第一報　　中村友吉

今日午後四時過き當地へ安着仕候間御安心可被下候。

今朝中上候通り當地發生のチーブスは稍蔓延の模樣にて已に避病院設立の都合に立ち至り小弟は不及ながら其の主任者と相成申候諸藥品諸器械及び病院も小弟の考へ通り行はれ申候間少しく安心致し候得共唯た一の不滿は看護婦の欠乏有之申候故に御地にて適當なる人物を壹名御送り被下度願上候若可然人物無之候節は急に御回報願上候（畧）

又今朝申上候牛酪及ジヤミ類之外ケツトの必要有之申候間如何程にても御贈付被成下度願上候

只今生等の一行は郡吏壹名巡査壹名に御坐候又萬事の入用品は意之如く供給有之申候誠に愉快なる働き可出來乎と希望仕居候當地に着するゝと仝時に下眼の外傷者有之其處置仕候又明朝はチーブス豫防に付村民集めて演說可仕運びに相成居候患者之診察は明朝より初むる積りに御坐候（畧）

十二月八日夜認む　　岐阜縣本巢郡外山村字小倉　中村友吉

〇大垣病院の方第一報　　玉生くに

大垣病院は醫學士猪子氏長たり、日々數限りなく來る患者あるうち、特に不憫なるは勉強盛りの男女子にて右の手足を切斷され又は頭に大傷を生じ一生事業に就くと出來ぬものと成果るもの多し、又若き女にて恥骨を折傷し一生產兒の力を失ふものあり、及最早死せんとして僅に生存する老人が、脊骨又は肋骨を折られし者、漸くは九才の兒に引れて來る老ひて盲ひなる人の大傷うけしものあり、目もあてられず候。病室は掘立小屋にて晝にても躰溫を見るに光をつける程にて眞にきたなきと限りなし。患者の躰はアカと虱にて滿ち油紙にさわる如し。私來りてより諸々の寄送品のつけ方を嚴しく致し候、此際途中にて我物にして幾人の惠の品を横取にするものあり悲しきことに候。院長は何事も任せられ、看病の都合宜しく、只だ主の御惠を感謝しつゝ樂しく働き候。

十二月十二日　　大垣病院にて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●震地傳道隊會計報告

第四回（十二月七日より十四日迄）

○入の部

金百〇二圓十六錢九厘　前回迄入金合計
金六十圓四拾錢　十二月七日より十四日迄入

右内譯

金十錢（八日）		兼井うつ氏
金一圓（九日）	札幌桑園内	相馬愛藏氏
金五拾圓（十日）	横濱山手	共立女學校
金廿五錢（十一日）		小倉岩藏氏 堀川泰洋氏 西條馬治氏
金一圓（十二日）		米澤市大町基督教會
金貳圓（十二日）	札幌南三條西七丁目三番地	札幌美以美會
金一圓拾錢（十二日）	築地	三一神學校
金拾錢		前橋某女
金五錢		前橋某
金一圓（十四日）	但馬出石基督教講義所内	杉立つき子
金五拾錢	同	青木姉
金五拾錢	同	湯谷敬子
金五十錢	同	日下部直枝
金三拾錢	同	船越彌生
金三十錢	同	大室きぬ子
金廿五錢	同	大室しづ子
金廿錢	同	吉澤姉
金廿錢	同	百瀬五郎
金廿錢	同	五歩一光
金廿錢	同	岡野さき子
金十五錢	同	太田いそ子
金五十錢	同	久保莊三郎

合計百六十二圓五十六錢九厘

○出の部

金七十八圓九十三錢一厘　前回迄出費合計
金二十三圓五十錢　七日より十二日迄出費

内譯

金十六圓五十錢（八日）	佐々木笑受郎氏持參
金四圓（八日）	小野坦氏へ送附
金一圓四十錢	湯谷氏へ向け送附雪靴代
金一圓三十九錢	過月中央會堂幻燈會用雜費拂
金十五錢（十三日）	北海孤兒院へ電報
金六錢	本週震地郵便用切手代
金四圓八十錢（十四日）	但馬出石よりの分直に湯谷礎一郎氏へ送致

合計金百〇七圓二十三錢一厘

●現殘五十五圓三十三錢八厘

○物品寄送の部

衣類五百點 内四百點震地へ送る	上州碓氷郡安中基督教會より
衣類四十七點	無名氏
全三品	吉田仲子
諸雜誌十七冊	無名氏
衣類百八十九品	高橋教會

右悉皆震災地大垣へ送附

附錄

○横濱共立女學校の來狀

謹啓陳者此度の尾濃震災救助に付ては内外朝野の別なく非常の盡力あるとなるが猶肉体上心靈上救助すべき件々尠からざる事に付弊校には例年のクリスマス祝會に相互の物品贈答を廢し之を震災救助に向けんとて教員生徒醵金せしに金五拾圓を得候に付今日通運社へ托し送呈候間何卒可然御取計被下度候右段早々拜具

十二月十日

横濱山二百十二番　共立女學校

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

巖本善治妻譯

小公子

（リツトル。ロ｜ド。フホントルロイ）

小供のよみ本

新版 去る十日發賣 少年文學書

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遙する幼兒が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネイ、と申たとか。考えて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御坐り升。邪道に陷らふとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の德を思ひ起させるは、神聖なる大職を擔ふ可愛の幼兒に限ります。故私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者此珍重すべきまろうどを尙一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髮の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且劇に演して非常の喝采を博しぬ。尙ほ譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁密書十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。一冊正價三十八錢。郵稅八錢也

發兌元 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

クリスマス及年暮年頭佳書

は面白き勸懲繪草紙にして第一子供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土産遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢 郵送料二錢

なれども女學雜誌の讀者に限り郵稅共七錢にて賣捌候間御注文の程願上候

第三版

百人一首講義

上製美本 三十五錢 郵稅六錢
並製淡裝 二十八錢 同 四錢

新年の讀書に宜し
歌留多遊びに宜し
遺物に宜し
詠歌に宜し

女學雜誌社

女學雜誌取次賣捌所

東京々橋區尾張町二丁目東海堂
仝神田武藏屋
仝京橋區彌左衛門町巖々堂
仝
京橋小西新聞舖
仝京橋區木挽町一丁目万字堂
仝神田錦町三丁目五番地朝陽堂
仝芝櫻川町萬春堂
神戶元町四丁目福音舍
大阪東區備後町四丁目岡島支店
京都佛光寺通烏丸東へ入ル東枝律書房
熊本市南新坪井町草野書店
大阪土佐堀
三丁目福音社
盛岡市中橋通東北堂
京都河原町二條下ル二丁目大黑屋
宇都宮
日野町小林格
神戶下山手通三丁目聚榮堂

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

早稲田文學第五號目次

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述　つれ〲草講義	一册	價金八錢
鈴木弘恭大人述　文法口授	一册	同十六錢
船越鼎太郎君著　產婦小兒攝生法	一册	同十六錢
中島俊子君著　善惡之岐	一册	同卅五錢
横山雅男君著　婚姻論	一册	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說　廢娼演說	一册	同五錢
巖本善治君述　妓樓全廢	一册	同五錢
島田三郎、巖本善治同著　公娼可滅	一册	同四錢
農學士寺尾熊三君著　植物學	一册	同十二錢

横井時雄

基督教新論

定價十五錢

目次

第一章　宗教とは何ぞや
第二章　他宗教實地の成績
第三章　基督教とは何ぞや
第四章　キリストの人物（一）天眞爛熳
第五章　仝上（二）仁愛化身
第六章　仝上（三）幸福圓滿
第七章　仝上（四）自損謙卑
第八章　神に關するキリストの意識
第九章　キリストの十字架
第十章　キリストの超絕せる品性及奇跡
第十一章　キリストの復活
第十二章　復活に關する懷疑說（一）閉息說
第十三章　仝（二）幻夢說
第十四章　聖靈の恩化及ひキリスト教徒の意識
第十五章　使徒パウロの信仰
第十六章　キリストの自言
第十七章　祈禱

賣捌所　警醒社

通信女學第三期生新募集廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならす、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〲少なく、旣に一家の妻となりし方にても晚學の勉强をさ〲年少の人に劣らぬも多し、槪して何處の婦女子も皆な學問と云ふとに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有かたきとと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進步日覺しきとなるか、旣に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に教師を引て教を受るも甚はだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一册の講義錄を出版して、四方晚學の婦人居なから普通の女學を獨り學びするの便に供へたるか、本年一月に至り、一ケ年の課業を恙かなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの七百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第二回の習讀者を募る。

教授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學、（衞生、育兒、看病を合す）裁縫、挿入地理、英學。

教師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、磯貝由太郎、木村祐吉、其他重もに明治女學校の教員諸君に委賴し、專ら親切鄭寧を主意とす。

代價一册前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せす。

明治二十四年一月廿五日第一號を發兌し、以後每月廿五日に出版して翌一ケ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

クリストマス贈品廣告

來ル廿日廿一日廿二日三日間一割引販賣

蒔繪物其他いろ〲

東京京橋區銀座二丁目十二番地

美術品商店　**萬家齋藤政吉**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

早稻田文學第五號目次

釋義　莊子　三島中州氏　詩經　信夫恕軒氏
講述　德川文學　關根正直氏　シルレル傳　森鷗外氏
　　　俳諧論　䂓庭篁村氏
評註　丹波與作　䂓庭篁村氏　マクベス　坪内逍遥氏
雜錄　支那小說の話　森槐南氏　詩話　野口寧齋氏
時文評論　●歐文直譯並訓點●國文學●國文學諸家●基督敎ト文學●「文壯」●浪花の輕文學●文學に關する諸雜誌●田口卯吉氏の辨解●新刊
附錄　八犬傳諸評答集䂓庭篁村氏

十二月十五日發兌

發行所　東京牛込早稻田　東京專門學校

發賣所　仝　神田一ッ橋通　有斐閣

シルレル傳はいよ〳〵佳境に入り八犬傳諸評答集はます〳〵妙域に進む鷗外氏の文篁村氏の筆共に是文界の偉觀槐南氏の支那小說の話、寧齋氏の詩話兩々對し双絕の文學と云ふべし

徳富猪一郎編纂
久保田米僊畫
誕生日

一册金十五錢　郵税貳錢　近日發賣

○斯書は父母兄弟姉妹朋友の誕節を記臆せんが爲め其の誕生日を記録する册子也
○巻中の一面には餘白を剰して其の人々をして自から其の姓名を誕節に相當する月日の欄内に記録せしむるを得可し是れ獨り其の誕生日を記録するのみならず併せて父母兄弟姉妹朋友の手蹟帳帖たるを得可し
○他の一面には東西の聖經賢傳詩歌金言を掲げ以て晨夕の諷誦に供す
○又た米僊子の清淡奇逸なる一年の期節に相當する細畫七十餘を挿めり
○斯書を編纂したる主旨は獨り自個の誕生日を記念し祝し且つ勵むに止らず併せて其の父母兄弟姉妹朋友の誕節を祝して慇懃傾倒の情を表するにあり是豈に人生の和樂を増し社會の情緒を温むる所以にあらずや
○册子小なりと雖淡麗清楚且つ各種の便宜備る金蘭簿たるを得可く備忘錄たるを得可く金誠集たるを得可く又た文苑繪畫の奇觀たるを得可し何人も一本を持す可き要書と信ず
○クリスマス及び新年祝の用品としては無上の佳書たる可し發賣近きにあり幸に御購求を請ふ

發兌元　京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四民必携 實用彙集 全

明廿五年一月五日發行ノ第百一號ヨリ一層大改良ヲ加ヘ且ツ右ノ冊子ヲ附錄ト爲ス

博聞雜誌大附錄

紅葉山人校閱 因產神樂 全

來ル廿日發兌ノ第百號ニハ本誌盛況ノ祝トシテ左ノ一切新小説ヲ別冊トシテ附錄トス

毎月二回發兌 定價一冊金八錢 半年分金四十五錢 全國無遞送料

發行所 東京芝區愛宕町二丁目十四番地 博聞雜誌社

詩文添削批評
河村巖城先生主任
謝料隨意諸郵券代用
返稿ハ五日間
改正詳則ハ郵券貳錢送致次第進呈スベシ

陸奥國弘前代官町
華月館

注意

本館ハ專ラ文學ノ普及ヲ圖ルノ主意ナレハ如何ナル初學ノ詩文ト雖モ勉メテ丁寧精密ニ添削批評シ及ビ男女老少ヲ問ハズ苟モ詩文ノ研究ニ從事セント欲スル者ハ皆喜ンテ館員ノ盟ニ加ハルコトヲ諾ス

廣告定價

一行 一回 前金拾錢 (廿七字詰)
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評するとあるべし。

特別廣告は婦女に關する協會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY